

## 「武者の世」の到来と国衙の諸相

文学部史学科教授 森 公章

はじめに

『愚管抄』巻五には、

保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国の乱逆ト云  
コトハヲコリテ後、ムサノ世ニナリニケルナリ。

とあり、平安末、鎌倉初期の人である慈円（一一五五～一二〇五）  
から見て、保元の乱（一一五六年）を嚆矢として、平治の乱（一一  
五九年）、治承・寿永内乱と続く中で、平氏の専制や鎌倉幕府の成  
立など、公家と並ぶ武家が確立していくことを的確に述べた評言で  
ある。その端緒となる保元の乱に関しては、鳥羽院政期（一一二九  
～一一五六）に様々な対立が醸成されたという要因が大きく、これ  
は都だけでなく、例えば久寿三年（一一五五）に武蔵国で勃発した  
大蔵合戦が保元の乱の前哨戦と称されるように、<sup>①</sup>そこに至る地方に  
おける諸関係の伏流・顕在化の様相にも留意する必要があると思わ  
れる。

私はこれまで天慶の乱に始まる武者の生成・展開や源平両氏の動  
向を検討し、<sup>③</sup>国衙機構の分析に関連して、在庁官人と武力の保持に  
関わる相撲人・武者の存在形態などを究明しようとしてきた。<sup>④</sup>鎌倉  
幕府を開く源頼朝につながる河内源氏については、源頼義・義家父  
子が関与した前九年・後三年合戦までを考究している。義家は「武  
士の棟梁」と喧伝され、坂東の源氏家人との紐帯を強め、鎌倉幕府  
成立に結実する河内源氏の一つの到達点を築いたとされてきたが、  
近年では義家の位置づけや坂東の家人との関係は大きく見直されて  
おり、義家段階ではそのような達成や安定性は構築されていないと  
する見解が有力になっている。<sup>⑤</sup>

そこで、小稿では後三年合戦以後の源義家や源平両氏の動向、国  
衙支配の様相と対立の惹起など、「武者の世」の到来につながる要  
因を自分なりに整理することを試みたい。治承・寿永内乱に関して  
は、各地域の対立が全国的に顕現する中で大々的に展開したものと  
する理解が有力になっていると思われるが、<sup>⑥</sup>なお「源平合戦」の枠

組みで把握するのがよいという意見もあり、<sup>7)</sup>より広い視野から「俯瞰的・総合的」に考える糸口として、その前段となる保元の乱に至る状況を改めて検討する必要があるところもある。源平両氏に留まらない武家社会成立の意義を考究する上でも、地域の動向は重要であると思われ、<sup>8)</sup>そうした事象に目配りするようにしたい。

ちなみに、慈円は「ムサ」、武者と称しており、『愚管抄』には「武士」の語も用いられているが、平安時代の古記録・古文書によると、「武士」の語は十一世紀末の『中右記』くらいから散見するようになり、それ以前は「武者」が一般的であると思われる（東京大学史料編纂所の「古記録・古文書フルテキストデータベース」を参照）。したがって私は史料用語に即して十世紀～十一世紀は「武者」として表示すべきものと考えてるが、源義家や今回の考察対象の時期は「武士」の語の出現が見られ、<sup>9)</sup>「武者」から「武士」への変化の意味合い如何にも留意したい。

## 一 河内源氏と伊勢平氏

まずやはり武家社会形成の主軸となる源平両氏の動向を見ることから始める。源氏では清和源氏の祖経基王―満仲から頼信―頼義―義家―義親―為義―義朝―頼朝と続く河内源氏、平氏では武家の桓武平氏の祖高望王―国香―貞盛から維衡―正度―正衡―正盛―忠盛―清盛とつながる伊勢平氏の展開に注目せねばならない。

01『中右記』 承徳二年（一一〇九八）十月二十三日条  
前陸奥守義家朝臣、若狭守《藤原》敦兼被<sub>レ</sub>聴<sub>二</sub>院昇殿<sub>一</sub>。（中略）  
義家朝臣者、天下第一武勇之士也。被<sub>レ</sub>聴<sub>二</sub>昇殿<sub>一</sub>、世人有<sub>下</sub>不甘心<sub>一</sub>之気歟。但莫<sub>レ</sub>言。

02『中右記』 嘉承元年（一一〇六）七月十六日条

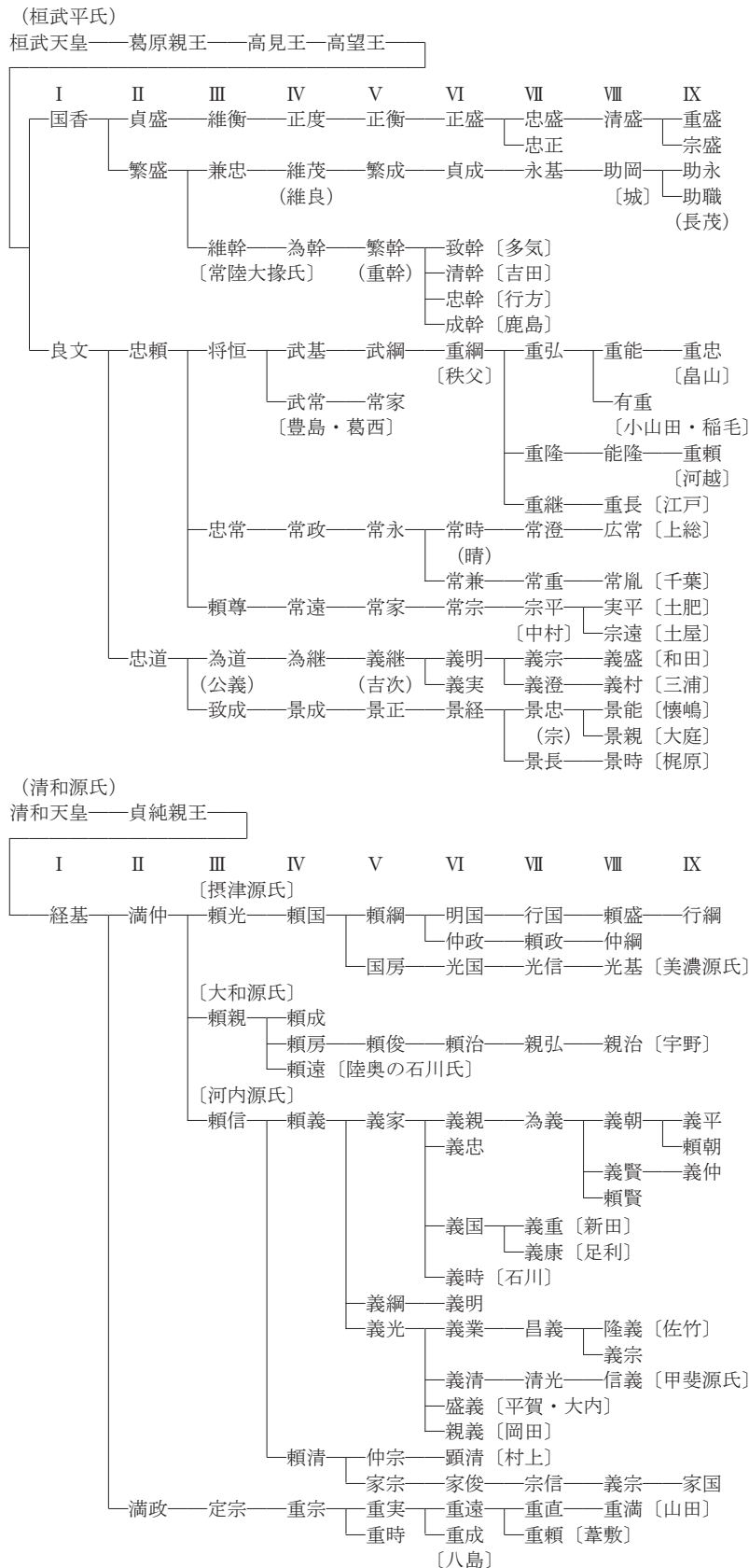
（上略）一日比陸奥前司源義家朝臣卒去。義家者故頼□〔義〕長男。経<sub>二</sub>下野・陸奥国等守<sub>一</sub>、位至<sub>二</sub>正下四位<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>院殿□〔上〕人<sub>一</sub>。武威満<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>誠是足<sub>二</sub>大將軍<sub>一</sub>者也。又上野前司藤原敦兼朝臣卒去（年六十人、位正下四位）。故明衡長男也。後冷泉院御時給<sub>二</sub>学門〔問〕料<sub>一</sub>、後三条院御時歴<sub>二</sub>藏人・□□〔式ア〕丞<sub>一</sub>、式部巡任<sub>二</sub>上野<sub>一</sub>。秩満之後已歴<sub>二</sub>数年<sub>一</sub>卒去也。天下属文之人莫非<sub>二</sub>弟子<sub>一</sub>。文武之道共以陵遲歟

03『中右記』 天仁元年（一一〇八）正月二十九日条

（上略）故義家朝臣年来為<sub>二</sub>武士長者<sub>一</sub>、多殺<sub>二</sub>無罪人<sub>一</sub>云々。積惡之余遂及<sub>二</sub>子孫<sub>一</sub>歟。未<sub>レ</sub>聞<sub>下</sub>本在<sub>二</sub>京都<sub>一</sub>身任<sub>二</sub>朝家子孫及<sub>中</sub>如<sub>レ</sub>此罪<sub>上</sub>。（下略）

史料01～03はいずれも『中右記』の記主藤原宗忠による源義家に対する評言で、01は白河院の院殿上人になった際のもの、02は死去時、03は子義親が濫行により平正盛に討伐された際の義親略伝の一部である。公戦であった前九年合戦とは異なり、後三年合戦は私戦とされたので、義家は砂金などの済物を完納することができず（『中右記』 永長元年（一一〇九六）十二月十五日条、承徳元年（一一〇九

図1 源平両氏の略系図



備考：『尊卑分脈』、『延慶本平家物語』 附載「坂東平氏系図」、「桓武平氏諸流系図」、北酒出本『源氏系図』などを勘案して作成。

七)二月二十五日条)、陸奥守の受領功過定を受けることができないままに、「浪人」状態が続く。この間、義家は源氏長者の左大臣源俊房に接近したようであるが(『古事談』巻四―一八)、俊房は白河院の直系皇統構築に対抗する実仁・輔仁親王(母源基子)を支持し、白河院から警戒されていたので、義家も院の信頼するところとはならなかった。白河院は弟義綱を重用しようとしたため、義家と義綱は郎等同士の対立から一触即発で合戦間際になり、世間騒動を惹起している(『後二条師通記』寛治五年(一〇九一)六月十一・十二日条)。

その後、嘉保二年(一〇九五)に義綱が延暦寺と紛擾を起こしたため、都の武力として義家への依存も企図したのか、義家は「院御気色」によって受領功過定を通過し(『中右記』承徳二年正月二十・二十三・二十六・二十七日条)、01の院昇殿を許された次第である。『梁塵秘抄』の今様に「驚の住む山には、なべて鳥は住むものか、同じき源氏と申せども、八幡太郎は恐ろしや」(四四四)と謳われ、01にも「天下第一武勇之士」と認知された義家であるが、貴族の目からは受領を歴任する諸大夫クラスで、内裏ではなく院の昇殿であっても、「世人有<sub>下</sub>不甘心之氣<sub>上</sub>歟」という秘やかな反発を抱かれている。とはいっても、02に「武威滿<sub>三</sub>天下」、03に「年来為<sub>三</sub>武士長者」とあるように、義家の武勇は認めざるを得ず、白河院が物怪に襲われた際に義家の武具を枕上に立てたところ撃退することができたという逸話があるように(『古事談』巻四―一九／

『平家物語』巻四「鵠」では堀河天皇の時のことで、南殿の大床で鳴絃して「前陸奥守源義家」と名乗ったところ、御悩が快癒したとある)、人だけでなく、辟邪の力を発揮する程のものと考えられていた。<sup>12)</sup>

02ではまた、文士の藤原敦兼の死去と合せて、「文武之道共以陵遲歟」と評されており、「はじめに」でも触れたように、この頃から「武士」の語が出現し、文士と並称される武士という位置づけが定まっていくようである。<sup>13)</sup> そもそも「武士」の語の初見である『統紀』養老五年(七二二)正月甲戌条には、「文人・武士、国家所<sub>レ</sub>重、医卜方術、古今斯崇」とあり、「優<sub>三</sub>遊学業<sub>一</sub>、堪<sub>レ</sub>為<sub>三</sub>師範<sub>一</sub>者」として、明経・明法・文章・算術・陰陽・医術・解工・和琴師・唱歌師、そして武芸が賞賜されている。<sup>14)</sup> 当該期の大江匡房撰『統本朝往生伝』(康和三年(一一〇一)以後まもなくの成立)の一条天皇条には、「皆是天下之一物也」として公卿クラスの人物に続いて、管絃・文士・和歌・画工・舞人・異能(相撲人)・近衛・陰陽・有驗之僧・真言・学徳・医方・明経、そして武士という並び順で挙げられ、諸芸の一つとしての位置づけは変わらず、職能論的武士の由来の論拠の一つになっている。

論を義家に戻すと、義家はついに前陸奥守のままで、新たな官職を得ることはできなかった。義家の長男義宗は早世したため(『尊卑分脈』三―二二四頁)、次子義親が後継者になる。義親は「従五位上対馬守左兵衛尉」「母三川守《源》隆長女」とあり、源隆長は

醍醐源氏、盛明親王の子孫である（三一四五頁）。三男義国は「母中宮亮《藤原》有綱女／或本云安芸守藤原有継女云々」とあり、

藤原有綱は北家内膳公孫、永保二年（一〇八二）三月二十二日卒で、文章博士にもなっている文人で（二二〇六頁）、義家の婚姻関係（有継は系譜不明）、公家社会での処世の一端が看取される。義親は「六位国功」、即ち守が六位相当の国（官位令によると、下国の守は従六位上、中国の守は正六位下）に関する成功によって対馬守になったといい（史料03上略部分）、対馬は下国（延喜民部上式）ながら、刀伊の入寇（一〇一九年）後には迎要国として、「武芸者」を任用すべきものとされていたので（『小右記』治安元年「一〇二二」四月三日条など）、「天下第一武勇之士」と評された義家の子息の任国として、それなりに考慮された登用であったと思われる。

04 『百鍊抄』康和三年（一一〇一）七月七日条

＊『殿暦』七月三・五日条も参照

可<sub>レ</sub>追討<sub>二</sub>対馬守源義親<sub>一</sub>之由宣下。依<sub>下</sub>横<sub>二</sub>行鎮西<sub>一</sub>冤<sub>中</sub>凌州民<sub>上</sub>。

05 『殿暦』康和四年（一一〇二）二月二十日条

＊同六月五・三十日条、『中右記』二月二十日条も参照

（上略）戊尅、右大弁持<sub>二</sub>来大宰府解<sub>一</sub>也。彼解云、殺<sub>二</sub>官使<sub>一</sub>云々。件事対馬前司義親（義家男也）并権守輔通等也。件輔通、義家従也。件輔通、於<sub>二</sub>義家之使<sub>一</sub>、義親を召取が為<sub>二</sub>、義家が所<sub>レ</sub>遣也。故如何者、件義親濫行を為<sub>レ</sub>宗故也。（下略）

06 『中右記』康和四年十二月二十八日条

＊同十二月十八・二十七日条、『殿暦』十二月二十七・二十八日条、『百鍊抄』十二月二十八日条も参照

（上略）今夕被<sub>レ</sub>行事、前対馬守源義親流<sub>二</sub>罪隠岐国<sub>一</sub>。従類二人流<sub>二</sub>罪周防・阿波一者。又同類前肥前守高階基実除名贖銅。上卿帥中納言（仲）。（下略）

07 『永昌記』嘉承元年（一一〇六）六月十日条

＊『中右記』長治元年（一一〇四）九月五・十八・二十日条、『殿暦』長治二年二月十八日条も参照

（上略）常陸国合戦事。又宣<sub>二</sub>下春宮大夫<sub>一</sub>。義光并平重幹等党、仰<sub>二</sub>東国司<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>召進<sub>二</sub>之。義国令<sub>二</sub>親父義家朝臣召進<sub>一</sub>之。（下略）

義親は義家の受領功過定通過や院殿上人への登用後に対馬守に就任したもの思われるが、史料04～06によると、鎮西の地で濫行を重ねたらしく、『古事談』巻四―二三には宮崎宮の訴えによるとあり、大宰府管内では有力寺社との紛擾によって府管長や国司が解任される例が多く、義親の濫行もその一例とすべきものであろう。05には義家が派遣した輔（佐）道<sub>二</sub>藤原資通（『尊卑分脈』二―三九二頁／『奥州後三年記』では十三歳で従軍）は義親の濫行を抑制し、召進すべき役割でありながら、義親と結託して官使を殺害するといふ行為に及んでおり、義親は隠岐配流、06によると、「同類」として前肥後守高階基実も処罰されているが、彼は高階業敏の孫（『尊卑分脈』四―一七頁）、女が義親の妻であったという（『長秋記』大治五年「一一三〇」九月九日条）。



史料07によると、三男の義国も死去間際の義家を悩ませており、彼は坂東への土着を進める中で、やはり常陸国で勢力拡大に努める叔父義光や常陸大掾氏と紛争を起こしている。07には義家に義国の召喚を命じたところがあるが、義国は上野国の新田氏、下野国の足利氏の祖となっているので、父義家が下野守時代に築いた拠点を足がかりに、坂東での活動に活路を求めたのであろう。新田氏の祖義重は上野介藤原敦基の女所生、足利氏の祖義康は信濃守源有房の女所生であり（『尊卑分脈』三―二三八・二四九頁）、直近の受領とも提携したり、父祖の拠点を継承したりして、それぞれに定着を図ることができたと思われる。ちなみに、『古事談』巻四―二一には、こうした子息の濫行もあってか、極楽往生したとされる頼義（『続本朝往生伝』）とは異なり、義家は「無間地獄之罪人」になったと記されている。

#### 08『尊卑分脈』源義忠の譜文（三―二三七頁）

叔父義光依<sub>レ</sub>含<sub>二</sub>鬱陶<sub>一</sub>、相<sub>二</sub>語鹿嶋三郎<sub>一</sub>、窃令<sub>レ</sub>害之。于<sub>レ</sub>時廿六歳。／叔父義綱依<sub>二</sub>虚名被<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>囚。為義奉<sub>レ</sub>勅、於<sub>二</sub>江州甲賀山<sub>一</sub>捕虜、即令<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>家義綱<sub>一</sub>降来、子息等自害。義綱子息義明、在京住<sub>二</sub>季房宿所<sub>一</sub>。同依<sub>二</sub>彼虚名<sub>一</sub>、源判官重時奉<sub>レ</sub>勅発向、追捕合戦。義明・季方等自害了。

義親の次に河内源氏嫡流となるのは義国の同母弟義忠であるが、彼は天仁二年（一一〇九）二月三日に郎等によって刃傷され、五日に非業の死を遂げる。史料08後半部分は概ね『百鍊抄』の記載によ

るものであるが、当初は頼義―義家の代から郎等になっていた満政流美濃源氏の源重実が嫌疑人とされ、彼は左大臣源俊房邸にいたらしく、この方面からの攻撃が想起されている。しかし、十六日には重実の弟重時が源義綱の子義明とその乳母夫藤原季方の追討に発向し、彼らが下手人と目されたらしい。季方は秀郷流、腰瀧口と称され、『奥州後三年記』では義光の郎等とあり、常に「剛の座」にいたといい、金沢柵攻防戦では、義家は反対したが、義光による清原武衡との開城交渉に派遣されており、義家とは若干見解を異にしていたようである。義明らの追捕に際しては義綱が憤激し、東国に赴こうとしたので、追討使として為義が発遣され、二十五日には義綱は出家、二十九日に佐渡配流となった（『尊卑分脈』三―二二四頁によると、「重被<sub>二</sub>追討<sub>一</sub>、仍自害畢」とある）。

一方、08前半部分には義光が鹿嶋三郎、おそらくは常陸大掾氏の一族に命じて殺害させたところがある。後三年合戦では義家と義光は巷間に伝えられるような兄弟愛で一致協力していた訳ではなく、義光なりに坂東や陸奥・出羽地域での勢力扶植を企図しており、<sup>17</sup>義家没後の河内源氏内部での覇権を目指したことも充分に考えられる。源義忠殺害事件の真相はよくわからないが、義家―義親の継承が不調になり、義家が死去する中、河内源氏の内部争いが顕在化したものと思われる、河内源氏は次々と人材を失い、義親の子で、当時十四歳の為義が当主になった。為義は若年で、かつ勢力が減退した河内源氏を立て直すことになり、自らの粗暴な行為、また郎等の離反や濫行

など、郎等の統制が不充分であったため、河内源氏の令名を押し下げるという負のスパイラルに陥る。

09 『中右記』天仁元年（一一〇八）正月二十九日条（03上略部分）  
天晴。今日但馬守正盛隨「身源義親首」入洛。（中略）首指「銚令」持「下人五人」。各付「赤比礼」書「名」（賊首源義「親脱カ」）、又從四人首。其左右取「打物」歩兵着「甲冑」□「者」四五十人許相從。次但馬守正盛、次男降人一人騎「馬相具」、次郎等百人、郎從百人許、劔戟曜「日」、弓馬連「道」。（下略）

この源義忠殺害事件に先立って、隠岐に配流になった筈の義親が出雲国に出没して悪行を重ね、院近臣として著名な善勝寺流の出雲守藤原家保の目代を殺害して官物を奪取するという出来事があり、やはり白河院に接近して台頭していた伊勢平氏の因幡守平正盛の追捕を受けている。正盛は早くも正月十九日には義親の首を切った旨を報告しており、上洛前に勳賞として但馬守に任用された（『中右記』天仁元年正月十九・二十三日条）。延喜民部上式では但馬・因幡ともに山陰道の上国であるが、当時の受領任国の位置づけでは但馬国の方が上位で、<sup>19</sup>ここには白河院の意向が反映されているのである。

10 『平家物語』卷四「南都牒状」  
祖父正盛、藏人五位の家に仕へて、諸国受領の鞭となる。大藏卿為房、賀州刺史のいにしへ、檢非所に補し、修理大夫顯季播磨太守たッし昔、厩別当職に任ず。

#### 11 『平家物語』卷二「西光被斬」

御辺は、故刑部卿忠盛の子でおはせしかども、十四五までは出仕もし給はず。故中御門中納言家成卿の辺に立ち入給しをば、京童部は高平太とこそ言ひしか。（中略）殿上のまじはりをだにきらわ（は）れし人の子で、太政大臣までなりあがったるや過分なるらむ。侍品の者の受領・檢非違使になる事、先例・傍例なきにあらず。なじかは過分になるべき。

伊勢平氏は維衡—正度の代には複数国の受領になっていたが、正度の子どもたちは生涯に一度受領になるのみで、檢非違使として都で活動するとともに、伊勢に拠点を築き、時に山賊追討で武威を発揮する（『扶桑略記』延久元年「一一〇六九」八月一日、閏十月四・七日条、『太神宮諸雜事記』延久元年七月二十・二十二日条）などの処世であった。<sup>20</sup>『平家物語』卷一「祇園精舎」には「国香より正盛にいたる迄六代は、諸国の受領なりしかども、殿上の仙籍をばいまだゆるされず」とあり、公達（五位直叙。三位以上に昇進可能）、諸大夫（六位↓五位・四位）、侍（六位が一般的、五位先途）という公家社会の序列では諸大夫と侍の境界に位置する存在で、侍品に下降する様相を呈していたようである。正盛の父正衡は『尊卑分脈』（四—六四頁）では「使／從四位、出羽守」とあり、『本朝世紀』康和元年（一一〇九九）正月二十三日条の除目で「出羽守從五位下平正衡（使巡）」と見えるので、こうした渡世であったことがわかる。

史料10によると、正盛は白河院近臣として著名な藤原為房が加賀守（寛治四年（一一〇九）六月五日～同六年九月二十日）の時に檢非所、また末茂流の藤原顯季が播磨守（嘉保元年（一一〇九）二月二十二日～康和三年（一一〇一）二月七日）の時に厩別当職と、武力で奉仕する受領郎等の役割を務めており、その後永長二年（一一〇九七）に伊賀国山田村・鞆田村の土地を六条院領に寄進した際には隠岐守になっているので（『平安遺文』一三八五号）、院近臣の上首者に近侍しながら、白河院とも直接的な関係を結んで、以後は受領を歴任することになる。したがって侍品から諸大夫に上昇し、その地位を安定して、院近臣、北面の武士として奉仕する道を確立することができたと言える。顯季の子が家保で、09の源義親追討もこの一家との関係の継続であり、11によると、正盛の子忠盛―清盛も家保の子家成とのつながりを保持している。

正盛は受領任国の格付けとしては最上位の一つである備前守になっており、この時に後に平氏家人として著名な備前国の難波氏、備中国の妹尾氏を郎等としていく契機を作ったと推定される<sup>2)</sup>。晩年に起きた肥前国藤津庄事件で庄司平清澄の子直澄を追討した際には、「正盛蒙<sup>三</sup>追捕宣旨<sup>一</sup>、遣<sup>二</sup>郎従<sup>一</sup>擲得云々」とあり、凱旋の行列では「隨兵百人、多是西海・南海名士也」と見えるのは、こうした人脈形成の成果を窺わせる（『長秋記』元永二年（一一一九）十二月二十七日条）。藤津庄は白河院とも関係が深い仁和寺寛助僧正の所領であったから、この追討も白河院への奉仕の一環と言えるよう。

ただ、但馬守任官に際しては、『中右記』天仁元年正月二十四日条に「而下臈被<sup>レ</sup>任<sup>一</sup>第一国<sup>一</sup>、世不<sup>二</sup>甘心<sup>一</sup>」という評言が記されており、01の義家の院昇殿と同様に、武者に対する公家社会の目は冷やかであった。また正盛の犯人追捕は河内源氏が鎮圧に従事した平忠常の乱や前九年・後三年合戦のような大々的な長期の戦闘ではないという特徴がある。そのためか、伊勢平氏の武力がどれ程強力なのか、武芸の力量如何には留保も残るところで、院によって演出された武勇者としての登場という観もある。『保元物語』中「白河殿へ義朝夜討チニ寄せラスル事」では、「昔、鈴鹿山ノ立烏帽子ヲ擲テ、帝王ニ奉シ山田庄司行季ガ孫也。海賊・夜討・強盜ヲ擲ムル事、数注ニ不及。大事ノ合戦ニ三度合テ、一度モ不覚仕ラズ」と豪語する清盛の郎等山田小三郎是行が源為朝の弓矢の前にあつてなく斃れる場面が描かれており、圧倒的な実力差を印象づけている。

源義親追討に関しては、白河院存命中から義親生存の風聞が散見しており（『朝野群載』卷十一永久五年（一一一七）五月五日検非違使序下文（越後国の平永基のもと）、『中右記』元永元年（一一一八）二月五日条（常陸国住人のもと）、大治四年（一一二九）七月七日に白河院が崩御し、鳥羽院政が始動すると、大治五年には二人の義親所稱者が出現、二人とも殺害されて義親生存説は消滅するという結末になる（『長秋記』大治五年八月三・九日、十一月十三日条、『中右記』十一月十三・十五・二十三日条）。うち一人は白河院と対立して籠居し、鳥羽院政下で復権する藤原忠実の庇護を得てい



たようであり、義親所稱者出現事件は白河院政期の陰の側面を強調するために利用された向きもあつて、正盛の後継者忠盛には苦々しい日々であつたと思われる。

12 『長秋記』 永久元年（一一一三）三月十四日条

今日依<sub>レ</sub>擲<sub>三</sub>夏焼大夫<sub>一</sub>、左衛門督平忠盛叙<sub>三</sub>從五位下<sub>一</sub>、院武者所宗友任<sub>三</sub>左兵衛尉<sub>一</sub>。件夏焼大夫、神仁与同心、穿<sub>三</sub>蘭林坊御藏<sub>一</sub>、取<sub>三</sub>御物<sub>一</sub>云々。仍一昨日左衛門志明兼欲<sub>三</sub>追捕<sub>一</sub>之間、得<sub>三</sub>其告<sub>一</sub>逃去、明兼郎等追<sub>三</sub>得桂河辺<sub>一</sub>合戦、隱<sub>三</sub>入松尾山<sub>一</sub>。郎等蒙<sub>レ</sub>疵空帰。其後件男出<sub>三</sub>京都<sub>一</sub>寄宿。聞<sub>三</sub>此旨<sub>一</sub>押寄追捕。其間郎等二人蒙<sub>レ</sub>疵及<sub>三</sub>死門<sub>一</sub>云々。

13 『中右記』 保延元年（一一三五）四月八日条

（上略）殿下被<sub>レ</sub>仰云、近日海賊競発、上下船不<sub>レ</sub>通。仍可<sub>三</sub>追討<sub>一</sub>之由、雖<sub>レ</sub>給<sub>三</sub>宣旨於国司等<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>今不<sub>レ</sub>叶、何様可<sub>レ</sub>行哉。（中略）以<sub>三</sub>藏人資信<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>奏<sub>三</sub>院<sub>一</sub>。仰云、遣<sub>三</sub>為義<sub>一</sub>者、路次国々自滅亡歟。忠盛朝臣可<sub>レ</sub>宜者。（下略）

14 『長秋記』 保延元年八月十九日条

忠盛朝臣虜<sub>三</sub>海賊七十人<sub>一</sub>、渡<sub>三</sub>檢非違使盛道・資遠・季則・近安・元方<sub>一</sub>、於<sub>三</sub>河原<sub>一</sub>請<sub>三</sub>取三十人<sub>一</sub>也。於<sub>レ</sub>殘自<sub>三</sub>閑路<sub>一</sub>渡<sub>レ</sub>是。天下皆見物。日高禪師為<sub>三</sub>賊首<sub>一</sub>。此中多是非<sub>レ</sub>賊、只以下非<sub>三</sub>忠盛家人<sub>一</sub>者<sub>上</sub>、号<sub>レ</sub>賊虜進<sub>三</sub>云々<sub>一</sub>。

その忠盛であるが、忠盛は父正盛存命中（保安二年（一一二二）四月二日死去）の史料12で夏焼大夫を追捕して榮爵に与り、白河・

鳥羽院の院近臣として受領を歴任、造営の奉仕などに努める。父と同様に備前守になり、13・14に海賊討伐でも活躍している。13中略部分では藤原忠実が主催する会議で藤原宗忠は「備前守忠盛朝臣・檢非違使為義等可<sub>三</sub>追討<sub>一</sub>由」を進言したことが記されているが、鳥羽院は為義を却下し、忠盛に討伐を命じた。上述のように、為義の素行や郎等統制には問題があり、院の信用が薄かったという問題があり、この時点での伊勢平氏と河内源氏の立場の違いが窺われる。この海賊追捕の勸賞により忠盛の子清盛は從四位下に昇叙しており（『中右記』保延元年八月二十一日条）、伊勢平氏の次代の発展を拡大するさらなる足場固めになったが、14に見えるように、軍事行動や武力結束の質的な問題は伏流したままであつたと言わねばならない。

平氏は本当の意味での厳しい戦役を経験しておらず、その真価が問われた実戦が治承・寿永内乱であり、平氏滅亡の重要な要因であるとする指摘もなされている。<sup>22</sup>この段階では河内源氏もそうであるが（『古事談』卷四―一八／義家の常備の郎等は五十人程度）、都を中心とする小規模な軍事行動や優位な状況での地方紛争の平定が主要な任務であつたという特徴が看取される。ちなみに、『古事談』卷一―八一には白河院の殺生禁断（『百鍊抄』天治二年（一一二五）条、大治元年（一一二六）六月一日・今年条など）に違反して鷹狩をした加藤大夫成家が召問された時、「成家ハ刑部卿殿相伝家人候。而女御殿供御断（料）ニ毎日ニ鮮鳥ヲ被<sub>三</sub>充召<sub>一</sub>候テ、若闕怠者可<sub>レ</sub>

処<sup>レ</sup>重科<sup>ニ</sup>云云。源氏・平氏之習、重科ト申ハ被<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>頸候也。(中略)  
勅勘ハ縦雖<sup>ニ</sup>禁獄・流罪<sup>ニ</sup>命ニハ依<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及、乍<sup>レ</sup>悦所<sup>ニ</sup>馳参<sup>也</sup>」と  
答弁したという逸話がある。刑部卿殿は忠盛で、忠盛が白河院が寵  
愛する祇園女御に奉仕していたことがわかるとともに、厳しい郎等  
統制に努めたことが知られ、公家社会とは異なる倫理の一端が窺わ  
れる。

## 二天養事件と坂東の行方

源為義は康治二年(一一四三)に摂関家の大殿藤原忠実とその子  
頼長への供奉を選択したらしい(『中外抄』上―五一、『台記』康治  
二年六月三十日条)。忠実は「如為義ハ強不可執廷尉也。天下之固  
ニテ候ヘハ、時々出来テ受領ナトニ可任也」と評したというが  
(『中外抄』、為義はついに受領になることはなかった。忠実側には  
権門としての摂関家の確立のために武力の編成も急務という要請が  
あったが、為義は白河院近臣藤原忠清を母とする義朝を廃嫡したら  
しく、新たに嫡男になった義賢は男色関係を含めて頼長に奉仕する  
ことになる(『台記』康治二年十一月五日条、久安四年(一一四八)  
正月五日条など)<sup>(25)</sup>。為義はまた、もう少し後に乱暴な為朝を九州に  
下向させるが、為朝は薩摩平氏の阿多権守平忠景の婿になっており  
(『保元物語』上「新院御所各門々固メノ事 付軍評定ノ事」、薩摩  
の地を選んだのは摂関家領島津庄の存在と庇護を期待することがで

きたためと思われ、摂関家との提携には河内源氏の新たな展開が構  
想されていたことを窺わせる。

一方、源義朝は坂東に下向し、独自に河内源氏の行方を方向づけ  
る活動を展開し、坂東の武者と関係を構築していく。そこで惹起す  
るのが相模国の大庭御厨事件と下総国の相馬御厨事件であり、天養  
元年(一一四四)前後に相次ぐ紛擾になるので、天養事件と総称し  
て考察を試みることにしたい。

15『平安遺文』二五四八号天養二年(一一四五)三月四日宣旨案  
(上略) 而間同《天養元年》十月廿一日田所目代散位源朝臣頼清并  
在庁官人及字上総曹司源義朝名代清大夫安行、三浦庄司平吉次男同  
吉明・中村庄司同宗平・和田太郎同助弘、所従千余騎、押入御厨  
内、不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>是非、所<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>停廢<sup>也</sup>。爰承<sup>ニ</sup>彼等所<sup>レ</sup>帶宣旨狀<sup>ニ</sup>之處、  
更不<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>御厨之事、只非<sup>ニ</sup>指官省符新立庄園、本庄之外加納一色  
別符可<sup>ニ</sup>入勘<sup>ニ</sup>之由也。又隣国他堺高家若悪僧等、可<sup>レ</sup>停<sup>ニ</sup>止乱入<sup>ニ</sup>之  
狀許也。仍為<sup>ニ</sup>神宮御領<sup>ニ</sup>尤大悦也、加之、於<sup>ニ</sup>當御厨<sup>ニ</sup>者、奉免宣  
旨有限之由、雖<sup>ニ</sup>披陳、敢無<sup>ニ</sup>承引<sup>也</sup>。神人等不<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>敵対<sup>ニ</sup>之間、始  
從<sup>ニ</sup>同廿二日卯時、在庁官人等押入郷郷、拔取勝示<sup>ニ</sup>畢。(下  
略)

御厨は伊勢神宮の所領で、仮名を称する神職が寄進を受け、上分  
として供祭料などの貢納を得るしくみで、現地では開発者・寄進者  
とその子孫が下司として実際の経営を担い、時に使・神職が下向す  
ることもあった。相模国大庭御厨は三浦平太郎為次(継)とともに

十六歳で後三年合戦に従軍し、金沢柵攻防戦で右目を矢で射られながらも奮戦した鎌倉権五郎景正（『奥州後三年記』上）が相伝私領を寄進したもので、高座郡宇殿原・香川・鵠沼などに所在、伊勢恒吉の仮名に附属され、宣旨・院宣や国判により立券が認められてきたようである（『平安遺文』二四四五号保延七年「一一四一」六月日相模国司解案など）。御厨定使并御蘭檢校散位重親や伊介社祝荒木田彦松と神人紀恒吉、志摩則貞・国元・末永・重国・兼次などが活動し、下司は平景宗であった。しかし、「在庁官人等乍存<sub>レ</sub>先判旨<sub>一</sub>、毎<sub>二</sub>任之初<sub>一</sub>、依<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>事煩<sub>一</sub>、住人逃散、田畠荒廢」という不安定な状態であり、おそらくは国免庄的な存在であったため、各地の庄園・公領でも頻発していたように、在庁官人は国司交替の機会をとらえて既墾地を収公して国衛の収入確保を企図し、そのたびに紛擾が起きていたのであろう。

康治（一一四二～一一四三）・天養（一一四四～一一四五〔久安元〕）年間には国衛と庄園間の係争を示す文書が全国的に存在し（『平安遺文』）、康治元年頃に発令されたと考えられる庄園整理令によって、内裏造管役賦課と関連した庄公領域の確定作業が行われたことが推定されている。<sup>27</sup> 大庭御厨事件も留守所目代・田所目代の源頼清と在庁官人らを中心とする軍勢での押取であるが、ここに上総曹司、つまり坂東に下向して上総氏の資養を得ていた源義朝が関与、彼は頼義・義家以来の由緒が伝えられる鎌倉之盾（館）に居住しており（『平安遺文』二五四四号天養二年二月三日官宣旨案）、高座郡

鵠沼郷の地を鎌倉郡内と称して、供祭料収納を妨害し、史料15上略部分には天養元年九月上旬に郎等の清原安行・字新藤太らに命じて荒木田彦松の頭を打破、神人八人も打損されて死門に及ぶような濫行ぶりが記されている。

そして、15の在庁官人と義朝の名代清原安行、三浦庄司平吉次（義継）次男義明ら千余騎による押入、御厨停廢である。当時の相模守は北家高藤流の鳥羽院近臣藤原頼憲（天養元年正月二十四日任「仁平二年（一一五二）正月二十八日遷」）で、彼は「於<sub>二</sub>義朝濫行之事<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>国司進止<sub>一</sub>、至<sub>下</sub>于擬<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>停廢<sub>一</sub>之事<sub>上</sub>者、召<sub>二</sub>問在国司<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>」という曖昧な対応を示しており、「以<sub>二</sub>神宮御領<sub>一</sub>号<sub>二</sub>院御領<sub>一</sub>、被<sub>二</sub>押取<sub>一</sub>」という指摘も見えるので（15下略部分）、義朝は国司の黙認、鳥羽院の後ろ盾をふまえて行動していたと目されている。<sup>28</sup> 15上略部分には直近の在庁官人として散位平高政・惟家、紀高成、平仲広・守景らの名前が見え、彼らが地頭に臨んで御厨の四至を定めて立券した筈であると非難されている。ここには坂東平氏諸流と思しき人物は不詳であるが、三浦氏に関しては「三浦兵衛尉義村者、祖父義明天治以来依<sub>レ</sub>相<sub>二</sub>交相模国雜事<sub>一</sub>、同御時、檢断事同可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之旨、義澄承<sub>レ</sub>之訖之由申<sub>レ</sub>之」という由緒を伝えている（『吾妻鏡』承元三年「一二〇九」十二月十五日条）。これは鎌倉幕府第三代將軍源実朝の下問に奉答したもので、頼朝からの守護補任の下文を賜与される以前、天治年間（一一二四～二五）には相模国の「雜事」に関与していたとある。三浦氏の出自については



必ずしも良文流平氏ではなく、三浦郡司の系譜を引く可能性も指摘されているので、「<sup>29)</sup>雑事」もそうした点とつながるのかもしれないが、やはり不明な部分が残る。

三浦・中村は庄司を名乗っているので、在庁官人とは別途な存在と目され、中村氏は当該期に三浦義継の子岡崎義実との間に婚姻関係が成立していたから、郡規模の勢力圏を有する存在として、鎌倉党の大庭氏と抗争状態にあったとの指摘もなされている。<sup>30)</sup>大庭御厨事件は御厨と国衛機構の対立を核としながらも、これに鳥羽院とつながる源義朝の武名や郎等の助力、それを機縁とした在地の勢力構図転換を目指す武勇の人々の意思が交錯して惹起したものと思われる。義朝は久安二年（一一四六）頃に上京し、久安三年には待賢門院側近の藤姓熱田大宮司家の季範の女との間に頼朝を儲け、仁平三年（一一五三）には下野守に任じられている。ちなみに、保元の乱では相模国からは平景宗の子景能（義）・景親が参戦しており、三浦氏などは見えない（『保元物語』上「主上三条殿二行幸ノ事 付官軍勢汰ヘノ事」）。大庭景能・景親は源為朝の強弓に對峙し、景能は膝の関節を射られ、景親の救援で何とか生還することができるといふ激戦を展開している（『白河殿攻メ落ス事』）。平治の乱では逆に大庭氏は見えず、三浦義澄の参戦が知られ（『平治物語』上「待賢門の軍の事」）、乱後には大庭景親は平氏家人になり、「東国の御後見」と称される枢要の立場で（『源平盛衰記』卷二十一「佐殿大場勢汰事」）、石橋山合戦では源頼朝の挙兵に立ちはだかる次第である。

こうした人間関係と行動の複雑な様相も、大庭御厨事件に一因があるとすれば、その後の地域や中央での出来事との関連は大きかったと言えよう。

16『平安遺文』二五八六号久安二年（一一四六）八月十日下午総国平

#### 常胤寄進状

（上略）常重依<sub>レ</sub>内心之祈念、大治（五脱カ）年之比貢進太神宮御領之日、相<sub>二</sub>副調度文書等<sub>一</sub>、永令<sub>レ</sub>附<sub>二</sub>属仮名荒木田正富<sub>一</sub>先畢。於<sub>二</sub>地主職<sub>一</sub>者、常重男常胤、保延元年三月伝領。其後国司藤原朝臣親道在<sub>レ</sub>任之時、号<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>公田官物未進<sub>一</sub>、同二年七月十五日召<sub>二</sub>籠常重身<sub>一</sub>、経<sub>二</sub>旬日<sub>一</sub>之後、勘<sub>二</sub>負准白布漆佰式拾陸段式丈伍尺伍寸<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>庁目代散位紀朝臣季経同年十一月三日押書<sub>一</sub>、相馬・立花両郷之新券、恣責<sub>二</sub>取署判<sub>一</sub>、已企<sub>二</sub>牢籠<sub>一</sub>之刻、源義朝就<sub>二</sub>于件常時男常澄之浮言<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>常重之手<sub>一</sub>、康治二年雖<sub>レ</sub>責<sub>二</sub>取壓状之文<sub>一</sub>、恐<sub>二</sub>神威<sub>一</sub>、永可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>太神宮御厨之由<sub>一</sub>、天養二年令<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>避文<sub>一</sub>之上、常胤（中略）依<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>濟国庫<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>常胤<sub>一</sub>為<sub>二</sub>相馬郡司<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>行郡務<sub>一</sub>之旨、去四月比、国判早畢。（下略）

次に下総国相馬御厨事件については、史料16上略部分には良文以来の伝領が述べられ（但し、図1とは異なり、忠常の父を経明とする）、常晴（時）が相承した際には「国役不輸之地」で、大治五年（一一三〇）に常重を養子に立てて譲与したとあり、常重が御厨として寄進し（『平安遺文』二一六一―三号大治五年六月十一日下午総権介平経繁私領寄進状案も参照）、保延元年（一一三五）に常胤が



地主職を継承したという。上述の三浦氏の守護補任の由緒と同様に、「千葉介成胤者、先祖千葉大夫、元永以後為<sub>二</sub>当庄檢非違所<sub>一</sub>之間、右大將御時、以<sub>二</sub>常胤<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>下総一國守護職<sub>一</sub>之由申<sub>レ</sub>之」とあるので（『吾妻鏡』承元三年十二月十五日条）、良文に始まるかどうかは措くとして、下総権介の肩書を有する常重（経繁）の父の代の元永年間（一一一八―一一一九）には相馬の地を拠点とする武威を振るっていたものと考えられる。常重は「在<sub>二</sub>庁権介<sub>一</sub>」とも称されているので（『平安遺文』三三九五・三四二五号）、国務に關与する立場であったことになる。<sup>31)</sup>

しかし、相馬御厨も「国役不輸之地」ではなく、保延二年に国守藤原親通に公田官物未進を指摘され、常重は召籠の処罰を被り、庁目代紀季経によつて相馬・立花両郷の新券文への署判を強要される仕儀になった。また上総介を称する常晴（『平安遺文』三一四八号）との間にも相論があつたらしく、源義朝を資養する常澄の言に依拠して、義朝が康治二年（一一四三）に常重から壓状を取り、天養二年（一一四五）に伊勢神宮に重寄進するという妨害にも遭遇している（『平安遺文』二四四九号天養二年三月十一日源某寄進状案）。その後、常重の子常胤は負累官物を国衙に納入し、相馬郡司としての地位を認められたというが、券文などの行方は複雑で、権利関係は未解決のまま推移していくらしい。

藤原親通は為光公孫で、母は「二条院半物龍女」とあり（『尊卑分脈』一一三九五頁）、彼の一族には崇徳天皇中宮の皇嘉門院（藤

原忠通の女聖子）の判官代も多く（三九六頁）、摂関家に從属していたと考えられる。保元の乱につながる摂関家の対立が顕在化するのには久安六年（一一五〇）に頼長への関白讓渡を拒絶する忠通に対して、忠実が忠通を義絶して藤氏長者の地位を奪つてこれを頼長に与えた時点かと思われるが（『台記』久安六年九月二十六日条など）、頼長は保延二年に十七歳で内大臣になっており（『公卿補任』。左大臣就任は久安五年七月で、時に三十歳）、上述の源為義との関係形成なども含めて、当該期には対立が続いていたと見られる。忠通は美福門院と連携し、鳥羽院側に立っているので、親通も忠通・鳥羽院とのつながりが深かつたのではないかと目される。<sup>32)</sup>

保元の乱では上総国の上総介広常、下総国の千葉常胤とともに義朝の配下で参戦しているが（『保元物語』上「主上三条殿二行幸ノ事付官軍勢汰ヘノ事」、平治の乱では広常のみが従事している（『平治物語』上「待賢門の軍の事」）。上述の大庭氏もそうであるが、保元の乱の際の義朝麾下の坂東の人々に関しては、義朝との主従関係によるところもあるものの、多くは国司を通じての動員であつたと見るのがよいとされており、常胤は平治の乱に参加していないことから見て、相馬御厨事件で義朝に臣従したという経緯はなかったと考えておきたい。<sup>33)</sup> 相馬御厨事件もまた、国司・在庁官人による収公、それに上総氏との対立という在地の事情が加わり、「上総曹司」源義朝が上総氏側に立つて武威を発揮したもので、千葉氏側としては苦々しい出来事であつたと位置づけられる。

千葉常胤は相馬郡司職を回復したというが、「在庁令<sup>レ</sup>実<sup>ニ</sup>檢地頭<sup>一</sup>之後、于<sup>レ</sup>今無音」のままに二宮御領に寄進したと述べており（『平安遺文』三一四八号永暦二年（一一六一）四月一日千葉常胤申状案）、在庁官人の判断保留のまま内宮・外宮領としての御厨を維持しようとしたらしい。この平治の乱の時点で、源義宗という者が、<sup>(34)</sup>

抑当厨相伝之理者、自<sup>ニ</sup>国人平（常脱）晴（今常澄父也）手<sup>一</sup>讓<sup>ニ</sup>平常重并嫡男常胤<sup>一</sup>、依<sup>ニ</sup>官物負累<sup>一</sup>、讓<sup>ニ</sup>国司藤原親通朝臣<sup>一</sup>、彼朝臣讓<sup>ニ</sup>二男親盛朝臣<sup>一</sup>。而依<sup>ニ</sup>匝瑳北条之由緒<sup>一</sup>、以<sup>ニ</sup>当御厨公驗<sup>一</sup>、所<sup>レ</sup>讓<sup>ニ</sup>給義宗<sup>一</sup>也。然者父常晴長讓<sup>ニ</sup>渡他人<sup>一</sup>畢処也。常澄・常胤等、何故可<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>妨哉。

と主張し、内宮・外宮に寄進して判文を得ており（『平安遺文』三二二一号永暦二年正月日源義宗寄進状案）、競合者が出現することになる。常胤はこの源義宗との相論（『平安遺文』三二四二・四三、三三九二・九四、三三三九、三三四八、三三九五、三四二五号）に加えて、ともに下総守であった藤原親通―親盛の後裔、親盛の子で、平忠盛の女婿であり、下総国匝瑳郡の千田庄領家として下向していた千田判官代親政（雅）とも対立を深めていく（『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）九月十三・十四日条）。

『平家物語』巻四「源氏揃」には「国には国司にしたがひ、庄には領所につかはれ、公事・雑事にかりたてられて、やすひ（い）思ひも候はず」、『延慶本平家物語』第二中―八に「国には目代に随ひ、庄には預所に仕公事雑役に駈り立てられて夜も昼も無安事」と

（『源平盛衰記』巻十三「高倉宮廻宣附源氏汰事」もほぼ同文）、源頼政が以仁王に反平家の蜂起を勧める際の情勢分析が示されており、治承・寿永内乱で千葉常胤が源頼朝を支援せざる得なかった追い込まれた状況を窺うことができる。<sup>(35)</sup> こうした紛擾の出発点として相馬御厨事件、天養前後の係争に留意すべきことを強調してみたい。

17 『延慶本平家物語』第三本「七木曾義仲成長する事」（上略）彼義賢去仁平三年夏比より上野国多胡郡に居住したりけるか、秩父次郎大夫重隆が養君になりて武蔵国比企郡に通けるほとに、当国にも不限隣国までも随けり。かくて年月をふるほとに久寿二年八月十六日故左馬頭義朝が一男悪源太義平が為に大蔵の館にて義賢・重隆共に被討にけり。（下略）

18 『台記』久寿二年（一一五五）十月十三日条  
伝聞、下野守源義朝、承<sup>ニ</sup>院宣<sup>一</sup>、為<sup>レ</sup>討<sup>ニ</sup>前左衛門尉源頼賢<sup>一</sup>、下<sup>ニ</sup>向信濃国<sup>一</sup>云々。義賢与<sup>ニ</sup>頼賢<sup>一</sup>成<sup>ニ</sup>父子之約<sup>一</sup>、而義賢為<sup>ニ</sup>義朝子<sup>一</sup>見<sup>レ</sup>殺。頼賢為<sup>レ</sup>報<sup>ニ</sup>其仇<sup>一</sup>、去月逃<sup>ニ</sup>信濃国<sup>一</sup>、遂侵<sup>ニ</sup>凌院御莊<sup>一</sup>。故使<sup>ニ</sup>義朝<sup>一</sup>討<sup>レ</sup>之。（下略）

そして、「はじめに」で触れた久寿二年（一一五五）の大蔵合戦である（『台記』同年八月二十七日条、『百鍊抄』八月二十九日条も参照）。史料17によると、源為義の嫡流になっていた義賢が仁平三年（一一五三）頃に上野国に下向し、武蔵国の秩父重隆の資養により勢力拡大を推進すると、秩父氏の内部対立を背景としながら、坂東に残っていた義朝の長男義平が大蔵館を襲撃し、義賢・重隆を殺

害する。この時に義賢の子義仲は二歳、駒王丸という幼名であり、攻撃に加わった畠山庄司重能がその殺害を命じられたが、重能は不憫に思い、長井庄の斎藤別当実盛に付託、実盛が信濃国の在庁官人と目される中三権守兼遠に養育を依頼して、木曾の地で成長することになる（『源平盛衰記』巻二十六「木曾謀叛事」）。

義平は橋本遊女を母とし（『尊卑分脈』三―二九五頁）、鎌倉悪源太と称されたが、『清和源氏系図』（『続群書類従』五上）には「鎌倉腹云々、母三浦大介義明女」とあり、その当否は措くとして、大庭御厨事件により関係を深めた三浦氏の供奉を受けていたらしい。秩父氏との関係では、重隆の父秩父権守重綱の妻は兄玉党有道経行の女で、この女性には「乳母御前」と称され、義平の乳母であったから、義平も秩父一族の内情に無関係ではなかった。経行の子（重綱の父武綱の女所生）行重・行高は重綱の養子になって平姓を名乗っていたから、大蔵合戦は重綱の死後に秩父氏家督と秩父氏が有していた武蔵国留守所総検校職（『吾妻鏡』治承四年八月二十六日、嘉祿二年四月十日、寛喜三年四月二・三十日、貞永元年十二月二十三日条）をめぐって、実子重隆―源義賢の勢力と養子の有道姓者・反重隆の兄弟―源義平の勢力が激突したものとされる所以である。<sup>36</sup>

なお、重能の子重忠は治承・寿永内乱の当初は平家方として頼朝の蜂起に対峙し、小坪坂合戦で三浦氏に敗北した後、衣笠城攻撃では三浦大介義明を戦死に追い込み、一旦は三浦の人々を安房方面に退去させている。その後、三浦氏は頼朝と合流し、千葉常胤・上総

広常の協力を得て大勢力となり、武蔵国に進撃し、その際に重忠ら秩父一族は帰服、ともに相模国に進軍して鎌倉に入ることになる。しかし、三浦一族と畠山重忠にはなお遺恨も残り、これが元久二年（一二〇五）畠山重忠の「謀叛」に際して、三浦義村が二俣川合戦での重忠殺害、さらに重忠の謀殺に加担した罪で秩父一族の稲毛重成らを討滅することにつながるといふ見立ても示されている。<sup>37</sup>

三浦氏や千葉氏がそれぞれの拠点を確立し、国衙に参画するなど地歩を固めていくのは十二世紀前半であり、そこから各地の武者の定着が本格化することになる。陸奥国南部の大和源氏系の石川氏や海道平氏流の岩城氏などの事例によると、十一世紀後半の第一世代の次に、十二世紀中葉の第二世代の段階で複数の家系に分かれ、十二世紀後半―十三世紀前半の第三・四世代では急速な一族の村々への展開・新村落の形成が進むとされ、治承・寿永内乱はこの第三・四世代の時期で、一つの村内にいくつかの家の所領が入り組んで存在し、さらに開発が進み、家の分出が行われると、この状況はますます拡大し、各家の間の利害・対立が惹起されて、大きな争乱になると展望されている。<sup>38</sup> 坂東に関してもこうした視点は有効であり、やはり天養事件をめぐる諸相がさらなる争乱につながる諸関係・対立構図へと展開する要因の一つであったと考えられる。



## 三 西国国衛の動向

寿永三年（一一八四＝元暦元）二月の生田の森・一ノ谷合戦を目前にした段階で、なお平家与力が期待される山陰・山陽・西海道の人々として、次のような面々が列挙されている。

18『延慶本平家物語』第五本「十五平家一ノ谷に構城墩事」

（『源平盛衰記』卷三十六もほぼ同文で、「」は異同を示す）

播磨国には津田四郎高基、美作国には江見入道、豊田権守、備前国には難波次郎経遠、同三郎経房、備中国には石賀入道、建部〔多治部〕太郎、新見郷司、備後国には奴可入道、伯耆国には小鴨介基康、村尾海六成盛、日野郡司義行、出雲国には円屋〔塩冶〕大夫、多久七郎、浅〔朝〕山・木須幾〔記次〕・身白が一党、富〔福〕田の押領使、横田兵衛惟澄、安芸国には源兵衛頼房、周房〔防〕国には石国源太維道、野介太郎有知〔朝〕、富田〔周防〕介高綱、石見国には安主大夫、横川郡司、長門国には郡東郡司季〔秀〕平、郡西大夫良親〔近〕、原宗〔厚東〕入道武通〔道〕、鎮西輩には菊地次郎高直、原田大夫種直、松浦太郎重俊、郡司権守直平、佐伯三郎維康、坂三郎惟遠、左原太郎種益、山鹿兵藤次秀遠、板屋〔坂井〕兵衛種遠。

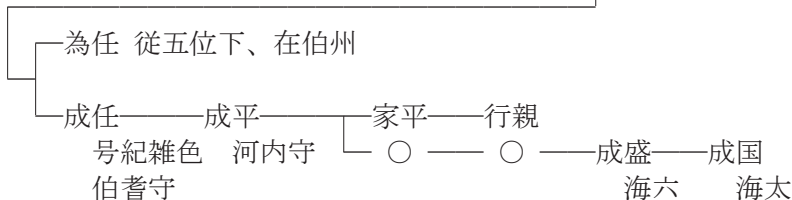
ここには権守・介、安主（案主）や押領使などの肩書、大夫の呼称等、国衛関係者と思しき人物、また郡郷司など、国郡機構に関わる人々が散見する。東国では武士が国衛に参画して在庁官人化するのに対して、西国では在庁官人が武士化すると指摘されており、古

くから朝廷の支配基盤であった西国における武家社会の出現は、前章で見た坂東、東国とは異なる過程をとるものであった（九州は東国と相似）<sup>⑩</sup>。史料18の人々がすべて平家に与同した訳ではないが、出雲国に関しては元暦元年五月日梶原景時下文（『平安遺文』四一七八号）において、石見国（安主〔案主〕大夫と見える藤姓益田氏が在庁官人の中心）に対して、「可早打進出雲国謀叛輩岐須木次郎兄弟式人・横田兵衛尉事」として、「健児・非違両直押領使・御家人・在庁官人承諾、打越出雲国、相共彼国人・御使、不日可推進」ことを令しており、確かに平家方に属する者がいたことが裏付けられる。<sup>⑪</sup>

浄土宗の開祖法然は長承二年（一一三三）の誕生、美作国の人で、「父は久米の押領使漆の時国」といい（『法然上人絵伝』、『黒谷源空上人伝』など）、「美作国庁官」とする史料もあり（『源空聖人私日記』）、天承元年（一一三一）九月十五日美作国留守所下文に目代とともに「散位漆——」と署名がある人物に比定できるとする見解も呈されている。<sup>⑫</sup>時国の家系は仁明源氏の源年が美作国に配流になり、久米押領使神戸大夫漆元国の女と結婚、漆盛行と改名し、盛行―重俊―国弘―時国という系譜であるという。時国は本姓である源氏を誇り、稲岡庄の預所明石の源内武者定明（伯耆守源長明の嫡男で、堀河天皇の滝口の武者／『台記』康治二年（一一四三）七月二十四日条によると、父定国が滝口で、出家して美作国に下向したとある）と紛擾になり、法然が九歳の時、保延七年（一一四一）春に夜



紀長谷雄——淑光——文利——忠道——  
致頼 伯耆守



時の美作守は平忠盛で、定明は「明石」の名乗りから考えて、忠盛の瀬戸内海の家賊討伐に関係する人物で、平氏家人であつて、預所に起用されたとする推測が呈されている。<sup>(43)</sup> 時国と定明の対立の原因は伝承的要素が大きく、不明の点が多いが、時国が在庁官人であつたとすると、これも国衙と庄園の係争、あるいは平氏の武威を背

景とする対捍、国守の家人と在庁官人の武力衝突といった要素が推定される。ところであり、時あたかも天養年間より少し前の出来事で、西国でもこうした紛擾が発生していたことが注目される。

19 『大山寺縁起卷』（洞明院本）三十七

近衛院ノ御宇、康治三年（一一四四）〔甲子〕正月十七日事始メ、同七月十八日ニ御躰供養アリ。（中略）中ニモ小鴨庄司ト聞ヘシ者ハ、殊更先師ノ大檀那トシテ、山里坊中ノ事マデ奉行シケルガ、当時故ラ威勢ヲ播シ、國中押並テ傍若無人ニ振舞ケレハ、村尾又權ヲ諍ヒ、敵人ト成ル。

事ニフレ遺悔多カリケレハ、鏡明房ノ為ニモ不安子細有ケル故ニ  
佐摩党トテ武勇ノ者有ケルヲ、村尾相語テ、鏡明房ヲ討テゲリ。  
(下略)

20『大山寺縁起卷』（洞明院本）四十二

『伯耆大山寺縁起』七十段、『続群書類従』二十八上）も参照／養和六年とある）

当国ニハ村尾・小鴨トテ、東ヲ固メ、西ヲ守ル二人ノ大将アリ。互ニ權ヲ諍ヒ、所々ヲ城郭ニ構ヘ、合戦更ニ不絶ケリ。村尾ハ修禪房ヲ師匠トタノミ、小鴨ハ月光坊ノ旦那也。中南両院、又事ニ触テ確執スル間、村尾カタメニ鏡明坊被討後、小鴨其宿意ヲ含テ、去ル養和元年（一一八一）二月廿八日ノ暮ニ、宗徒ノ兵十余人差違ヘ畢ンヌ。修禪坊本房、摩尼院ト云所ヘヨセタリケリ。人静リ隙ヲ窺ヒケルニ、修禪房行法ノ折節、鈴ノヒビキ耳ニトヲリ、肝ニソミテ不得進ミ。面々ニ心ヲハゲマシテ打入ントシケレトモ、鈴ノ声喧クシテ、木モ草モハタメキ、五銚三銚錫杖ツフアレコトシ、身ノ毛ヨダチケレハ、弓矢ラステ逃走ニケリ。

21『吉記』寿永元年（一一八二）八月二十日条

（上略）風聞、伯耆国住人成盛〔搦梅〔称海力〕六、先年為「基保被」滅亡者也〕与「基保」〔称「小鴨介」〕合戰。基保被「追落」、死者不知幾千。出雲・石見・備後等国々与力云々。

22『玉葉』寿永三年（一一八四）二月二日条

(上略) 伝聞、伯耆国美徳山有<sub>下</sub>称<sub>二</sub>院御子<sub>一</sub>之人<sub>上</sub>、生年廿歳、未<sub>二</sub>元

表1 村尾・小鴨両氏の動向と対立の軌跡

康平7年(1064)	…紀成平が頭人として大山寺に奉幣
康治3年(1144)	…村尾氏が佐摩党とともに鏡明房を討つ
承安2年(1172)	…紀成盛が大山寺鉄製厨子銘を作成
養和元年(1181)	…小鴨氏が修禅坊を攻撃しようとする ※この時に海六成盛も攻撃され、敗退か
寿永元年(1182)	…海六成盛と小鴨基保が合戦し、基保が敗退 死者数千人。出雲・石見・備後からも与力あり
寿永3年(元暦元=1184)	2月2日…美徳山に後白河法皇の皇子と称する者があり、海陸業 成(海六成盛)が支援。既に伯耆半国を攻取するも、 小鴨基康は従わず 2月7日…生田の森・一ノ谷合戦時に伯耆国では小鴨介基康、 村尾海六成盛、日野郡司義行が平家方に期待される ※『小鴨系図』では基康は兵糧を送っただけとい い、また成盛が平家方の加担するのは？
建久元年(1190)	…海太成国(成盛の子か)が院召次陵轡により、 鎌倉に召下される
弘安6年(1283)	…紀秀員が山田八幡宮の鐘を鋳造

服云々。件宮、資隆入道外孫云々。幼稚之時、九条院被<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>養育<sub>一</sub>、其後依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>、在外祖父家。然間、生年十五之年、無音逐電、人不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>其意趣<sub>一</sub>。即向<sub>二</sub>大和国<sub>一</sub>、暫隨<sub>二</sub>逐<sub>二</sub>三川冠者<sub>一</sub>、(其時称<sub>二</sub>成親卿子<sub>一</sub>也(云々))。其後到<sub>二</sub>伯耆大山<sub>一</sub>、次移<sub>二</sub>住美徳山<sub>一</sub>、猶称<sub>二</sub>成親卿子<sub>一</sub>。而平氏被<sub>二</sub>追落<sub>一</sub>之後、顯<sub>二</sub>其实际<sub>一</sub>称<sub>二</sub>院御子<sub>一</sub>。已伐<sub>二</sub>取伯耆半国<sub>一</sub>、海陸業成(成カ)〈彼国有勢武勇者也〉奉<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>之。但小鴨基康

不<sub>レ</sub>從云々。又美作国小々打取了。昨日上<sub>二</sub>使者於京都<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>院見参<sub>一</sub>云々。奉<sub>レ</sub>仰源氏相俱可<sub>レ</sub>伐<sub>二</sub>平氏<sub>一</sub>云々。事次第奇異也。仍為<sub>レ</sub>後記<sub>レ</sub>之。(下略)

史料18に登場する人物に関連しては、伯耆国の小鴨氏と村尾氏の対立が知られる。小鴨氏は史料21にも「小鴨介」の称が見えるように、国府所在の久米郡小鴨郷を拠点とする在庁官人の上首者である。村尾氏は本姓紀氏、小野宮流の藤原資頼が伯耆守の時(治安元年(一〇二一)～万寿元年(一〇二四))に対捍行動をとった紀成任(『小右記』治安三年八月八・九日条)を曩祖とし、西部の日野郡村尾の地を苗字としている。紀成盛<sub>II</sub>村尾海六成盛は「会東郡地主」を称しており(『平安遺文』金石文編四二五号鳥取県大山寺鉄製厨子銘/承安二年(一一七二)十一月二十日)、西端の会見郡域を拠点としていたようである。「海六」の呼称に関連しては、伯耆国の海部氏の存在は不明であるが、会見郡には安曇郷があるので、紀氏姓村尾氏はこの海部氏と合体して勢威を築いたとも考えられる<sup>44</sup>。史料19によると、さらに汗入郡佐摩の佐摩党という「武勇ノ者」とも密接な関係をもっていたことがわかるので、広く西伯耆に基盤を構築していたのであろう。

伯耆国の宗教勢力としては大山寺の存在が大きく、大山寺には南光院、中門院、西明院の三院があった。史料19・20によると、村尾氏は南光院修禅坊を支持し、小鴨氏は中門院月光坊と師檀契約を結んでいた。南光院と中門院は常に対立関係にあり、西明院は時々の

情勢によりどちらかと結託したといい、大山寺内の対立は国内諸勢力の動向と連結する形になっている。その最初の大きな紛擾は史料19の康治三年（一一四四＝天養元）の出来事であり、これも天養事件の一つとして位置づけることができる。ここでは村尾氏が佐摩党と結んで、小鴨氏が支持する月光坊門徒の鏡明房という者を討ったとある。その後の紛争の行方は不明であるが、下略部分には鏡明房が悪霊になって佐摩党の人々を取り殺す話が記され、「サレバ月光坊ノ悪霊トテ于今崇メ貴マスト云事ナシ、不動ノ化身トコソ申伝ヘケレ」と評されている。

小鴨・村尾両氏は登場しないが、仁安三年（一一六八）十月に六条天皇の大嘗会召物徴収の官使が入山するという出来事があった（『大山寺縁起卷』（洞明院本）三十四）。これは南光院別当明俊が引き入れたもので、明俊は「出雲・伯耆両国ノツハモノヲ語テ、数千騎ノ勢」と河村郡の美徳山の勢力を後ろ盾にしていたという。それに対して中門院・西明院は明俊の討滅を企図し、嘉応二年（一一七〇）四月に合戦になり、「中門五十余人ノ悪僧等・数百騎ノ軍兵ト合戦ス、非可向面ヲ、軍兵キリ立ラレテ引退ク、勝ニノリ南光院ヘ打入、火ヲ放テケリ。南光院、又中門ヘ乱入テ、同火ヲカケタリ」という乱戦になり、両院が焼失する有様であった。中門院・西明院は南光院に加担した美徳山を怨み、「美徳山ノ子守・勝平（手力）・蔵王堂大堂講堂清涼院、無残コソ焼払ヒケリ」という報復も行っている。南光院側の「ツハモノ」には村尾氏、中門院側の「軍兵」に

は小鴨氏の存在が推察され、これも紛争の継続を示す事例となろう。

そして、史料20～22の治承・寿永内乱に関係した対戦である。まず20では19の村尾氏による鏡明房討滅に対する報復として、小鴨氏が養和元年（一一八一）に兵十余人で修禪坊の本房の摩尼院で行法中の修善房を襲撃しようとしたが、修善房の法力によって撃退されたという。但し、21には「先年」、つまり20の段階で村尾海六成盛が小鴨介基保（康）によって「滅亡」されたと記されており、この「滅亡」は敗戦の謂であるものの、この時には小鴨氏が村尾氏に打撃を与える結果になっていたことが窺われる。次いでその21は寿永元年（一一八二）に村尾氏が小鴨氏と合戦して、これを撃破したとあり、この紛争では出雲・石見・備後等の国々が与力したというから、広域的な武力を巻き込んだ大々的な戦闘になっていたことが知られる。

こうした一進一退の激闘をふまえて、22では後白河院の落胤と称する「伯耆王子」をめぐる対立になっている。<sup>945</sup>平安末期の伯耆国は国守交替が頻繁に行われていたが、院近臣受領の時には西伯耆で院領庄園の立庄が活発であった。平時忠が知行国主になった時点で平氏勢力の影響が浸透し、治承三年（一一七九）十一月の政変の際には二ヶ月間だけであるが、清盛の弟忠度が国守になっており、在庁官人系の小鴨介基康は平家支持の立場からか、この「伯耆王子」には従っていない。「伯耆王子」を支えたのは村尾海六成盛と美徳山の勢力であり、22によると、伯耆国を二分する争いであったといい、

「伯耆王子」側は美作国にも進出する勢威を示していた。

したがって成盛は明確に反平家活動を展開していたから、18の生田の森・一ノ谷合戦に関連して平家側に参戦することはなく、また直前の22の状況を考慮すると、基康も参戦できる状態ではなかったと思われる。伯耆国での戦闘は周辺の国々にも影響を与えていたから、この点は18に記された伯耆国以外の人々についても該当し、18はあくまで平氏側の願望を示すものと解さねばならない。基康に関しては生田の森・一ノ谷合戦には参戦せず、兵糧を送っただけとする史料もある（『小鴨系図』）。正和五年（一二三六）五月三十日六波羅御教書案（『鎌倉遺文』二五八五二号）では日野氏の所領争いについて、小鴨左衛門尉に御教書が下されるという活動例が知られ、小鴨氏は守護代に比定されるから、鎌倉時代にも勢威を維持していたことがわかる。<sup>(46)</sup> 小鴨氏は平氏との関係をうまく精算し、源氏方につくことができたのであろう。紀姓村尾氏も御家人として存続しており（『吾妻鏡』建久元年六月二十七日条）、国府所在の久米郡にまで勢威を及ぼす存在として健在であった（『鎌倉遺文』一四八〇五号弘安六年（一二八三）三月十五日紀秀員鑄鐘願文／久米郡北条郷山田八幡宮の椎鐘）。

以上、西国の伯耆国の事例を検討した。治承・寿永内乱期に関してはその他に因幡国の在庁官人・一宮宇倍社の神職である伊福部臣氏、安芸国や阿波・讃岐・土佐国などについて別稿にて考察を試みているが、<sup>(47)</sup> 鳥羽院政期の天養前後の状況は不詳であるので、次に九

州の事例をみていくことにしたい。

23 『平安遺文』四七一九号久安元年（一二四五）肥後国訴状案

① 「「百六十三疋五丈之上、於領」「後、前司秦重朝臣任以後、年別七斗甘葛汁凡不進濟、為極訴之處、去天養元年（一二四四）十二月十九日、日中押圍貢御所野部山專当近包宿所、運取貢御甘葛之後、直令殺害近包之身了。即雖訴申、无其沙汰。所行之旨、謀殺第一也。早奏聞公家、欲被行罪科矣。／②一同広実養子秀実射危目代、射傷雜色貞清、殆及死門事。大將軍広実二男秀実、郎從二人（彌藤次、内五男）、残十余人（不知姓名）。追取馬三疋、綴牛皮一領、胡録一腰。副進府解一通。右、件秀実、於国庁館下関部路頭、数度射危目代兩人、希有存命。又射傷雜色海貞清了。事之子細見于府解。訪之古今、未曾有事也。仍奏聞公家、欲行罪科矣。／③一同広実運取公物稻千束・米十六石事。詫万西郷木部保司訴申稻六百束并八代北郷豊福保内封納稻四百束・米十六石運取事。右、木部保内田堵市丸作田所当官物府米封納之後、今年二月之比、不憚国威、恣所運取也。又豊福保稻事、去二月卅日在庁解・官使等申文明白也。凡如是公物押取之条、古今未曾有事也。偏国中濫行、唯在広実一人。仍奏聞公家、欲懲後昆。／④一田口新大夫行李焼掃公地山手村押取雜物旁致損亡事。与力人、僧嚴仁、経盛男高三太郎、同後子乗月房。右、件行李背伯父経盛沽券、去康治二年（一二四三）四月三日午前、引率千余人軍兵、発向権介季



宗私領山手村、搜取内財雜物、焼掃四十余字之家、恣打損建部成末・菅野為国、所追取女六人也。損亡米廿五石二斗六升・粃十五石・稻二百卅五束・大豆十八石七斗二升・小豆一石五斗五升・蕎麥一石七斗九升・苧稗四百廿束・苧麥四十五束・胡摩六升・塩一石一斗六升・輕色准絹八千二百八十九疋、自余雜物不可勝数。又去年内檢之間、乘馬一疋押取了。謂其直法、既五百疋也。仍奏聞公家、欲懲傍輩矣。／⑤一同行季去四月中旬打凌礫国使權介近依、殆及死門事。右、件行季者、砥川大夫経盛之甥也。彼経盛死去之尅、為官物之弁、定彼近依入向之日、田口大夫経延并行季為張本、不論是非、所打凌礫国使也。乍置嫡子盛延、巧謀計、企非論之条、左道第一也。狼藉之至、何事如之。仍奏聞公家、欲被斷罪矣。兼又行季所運取之国库納砥川官物米四十三石五斗・稻千八百八十八束、可被糺返也。／⑥一久万郡住人貞倫并舍弟六郎重平等、追掃同郡住人守高城内、押取種々雜物・人馬、虜領彼所領田畠事。与力人、日向国真幸院住人字小郡司貞重・波多利三郎别当正晴・入田太郎貞明・和泉比草次末平・草藤次貞守、当国住人八代藤三重永・同所従（字四郎别当同舍弟）（後欠）

史料23は前後欠の文書であるが、登場人物の比定や地名から肥後国に関わるものと目され、六項目（以上）の紛擾が記されている。

①には天養元年（一一四四）、④には康治二年（一一四三）の年紀が見え、天養前後の状況を知る材料とすることができる。<sup>49</sup>①③に

関与する広実は、承安三年（一一七三）正月十八日肥後国源顕実山地寄進状（『平安遺文』三六一八号）の源姓木原氏につながる人物に比定され、②の「將軍」の称から見て、相当数の軍兵を率いる一国棟梁への道を歩む存在と考えられる。当該期の肥後守は天養元年十月三日任の源行能（俊国）が知られ（『尊卑分脈』三―五二八頁、村上源氏顕房の孫）、②では国府周辺での目代襲撃、③では国衙領である保の官物掠奪が指弾されており、官物の納入をめぐって国衙と広実の一族が対立する様相が看取される。②に「同広実」とあるので、①も広実の活動で、供貢の甘葛汁（延喜主計上式には肥後国の中男作物に黒葛あり）をめぐって貢御所野部山専当の近包という者が殺害されている。「前前司泰重朝臣」は大治三年（一一二八）正月二十四日任の高階泰重、業遠―成経―泰仲―重仲―泰重―泰経という系譜（『尊卑分脈』四―一二三頁）の院近臣で、肥後守は保延三年（一一三二）正月三十日任の平清盛、康治元年（一一四二）正月二十三日任の清原信俊と続くが、この間甘葛汁の進済がなかったという問題に起因する事案であるらしい。

そして、④・⑤が菊池氏の関係者の動向である。ここに登場する人々は『菊池系図』には見えないが、「経」を通字としており、菊池氏一族に比定される。⑤によると、砥川大夫経盛とその嫡子盛延は砥川の地の官物を国衙に納入しようとしたが、兄の田口大夫経延やその子田口新大夫行季、また経盛の別の男子である高三太郎・乗月房らはこれに反対し、一族間の争い、かつ国衙への対捍となつ

た。大夫を名乗る人々は国衙への参画と国衙領経営の委任が推定され、④では田口行季が千余人の軍兵を引率したとあるので、大きな軍事力を有していたことが知られる。④においては在庁官人の上首者である権介季宗との対立が描かれている。季宗は肥宿欄姓とする推測もなされており、<sup>51)</sup>山手村を私領として、建部成村・菅野成末などを従え、在家四十以上を支配していたというから、相応の武力を保持する存在と目される。肥後国における建部姓者は飽田郡の郡司氏族として知られ（『平城宮木簡』三〇〇号「天平三年」、『三代実録』貞観三年八月二十一日条）、⑤の国使権介近依は①の野部山専当近包との類縁関係が推定される。とすると、ここには古代豪族の系譜を引く伝統的な在庁官人と新興の菊池氏との対立という要因もあったのかもしれない。

24『平安遺文』五〇七五号養和元年（一一八一）十二月肥後国鹿子

木庄雑掌成安解

肥後国鹿子木御庄雑掌成安解 申請 勝功德院政所裁□。請<sub>レ</sub>被<sub>下</sub>殊蒙<sub>二</sub> 恩裁<sub>一</sub>免除<sub>一</sub>、且為<sub>二</sub>阿蘇神人濫行<sub>一</sub>、且依菊池高□〔直カ〕不<sub>レ</sub>運<sub>二</sub>上年々御年貢米<sub>一</sub>未<sub>一</sub>。』（下略）

上述のように、源姓木原氏は十二世紀後半にも健在であるが、菊池氏も史料18に登場する菊池高直（隆直）が「菊池権守」と見え（『玉葉』治承四年（一一八〇）十一月十七日条）、平家方の期待に反して、在庁官人の上首者として源氏方として活躍し、以後の菊池氏の繁栄を築いている。史料24によると、国衙領だけでなく、鹿子

木庄の年貢進上も請け負っていたことが知られ、庄園・公領ともにかうした武勇の人々に依存せざるを得ない状況になっており、「武者の世」、地域社会を担う存在としての武家の地位が確立していくと展望される。史料23の⑥ではまた、久万（球磨）郡住人と八代郡や日向国真幸院住人との結合が看取され、国郡域を越える広範囲な与党形成や紛擾の発生も推察されるところである。

その他、薩摩国では後に源為朝を婿にする薩摩平氏阿多権守平忠景の活動も、この頃から散見している（『平安遺文』二三九八号保延四年（一一三八）十一月十五日薩摩国阿倍多郡司平忠景解案、三二二〇号応保二年（一一六二）五月十五日大隅国臺明寺住僧解、『山槐記』永暦元年（一一六六）七月八日条、『平安遺文』四一〇一号寿永二年（一一八三）八月八日島津庄別当伴信明解など）。<sup>52)</sup>保元の乱の際に源為朝には二十八騎の腹心があり、それは乳母子の箭前掃の須藤九郎家季とその兄で山法師を還俗した悪七別当、打手の城八、手取の余次三郎、三町ツブテの紀平次大夫、止矢の源太、左仲二、大矢の新三郎・同四郎、霞五郎、吉田太郎、兵衛太郎などの面々で（『保元物語』上「新院御所各門々固メノ事付ケタリ軍評定ノ事」、特に忠景からの支援があった訳ではなさそうである。ただ、忠景は平氏専制下に筑後守平家貞による討伐を被り、貴海島に逃げ込むことがあり（『吾妻鏡』文治三年（一一八七）九月二十二日条）、また為朝の子義実が源義経に加担して薩摩方面に逃走したとの嫌疑をかけられており、<sup>53)</sup>中央の源平両氏との関係構築は不首尾であった。

忠景は大隅国の有力在庁官人税所氏につながる檜前篤房と結託して、臺明寺の寺領田を押取しており（『平安遺文』三三二〇号）、島津庄別当で、相撲人の伴信房と争い（四一〇一号）、また本拠地である阿多郡と加世田別符（忠景の弟忠明が別府氏の祖）の境界に立地する持鉢松遺跡や貴海嶋との関係からは日宋貿易への関与も窺うことができ、地域を超越した幅広い活動を志向していたようである。<sup>54)</sup> 薩摩平氏は肥前平氏からつながっており、忠景の父良道（行道）が「薩摩国住人平行道、依<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>妹夫<sup>一</sup>、禰寢院南保令<sup>ニ</sup>讓渡<sup>一</sup>由無実」と指弾されているのが確かな活動の初見で（『平安遺文』一九一六号保安二年（一一二二）正月十日大隅国権大掾建部親助解）、忠景の兄弟は広く薩南の地に拠点を築いているから、やはり鳥羽院政期にその後の展開の起点となる地歩を得ていることが窺われる。

大宰府下では仁平元年（一一五一）九月二十三日に宮崎・博多の大追捕（大索）で検非違所執行の大監種平・季実らが軍兵五百余騎を引率しており（『宮寺縁事抄』宮崎造宮事）、保元元年（一一五六）の宇佐八幡宮造営では各国に対する造営割り当ての拒捍使として「種」を通字とする人々が見え（『平安遺文』二八三九号）、保元の乱以前に大蔵氏流による武力掌握の体制が確立していた（季実は『平安遺文』補三一九号に登場する大監三毛大夫季実で、大蔵氏流、「大將軍」と称され、やはり五百余人の軍兵を率いる）。永暦元年（一一六〇）に平清盛の家人筑後守平家貞によって平定された日向太郎通良の乱に関しては、追捕使や権守を輩出する兄弟の幸通の系

統との対立が推定され、押領使として知られる藤姓高木氏などの動向ともども、肥前国でも武力の対立や濫行が潜行していたようである。<sup>55)</sup> こうした情勢が各地で惹起していたという点で鳥羽院政期の社会を考究することの重要性に改めて留意したいと考える。

#### むすびにかえて

小稿では「武者の世」の到来の前段階として、十二世紀中葉の鳥羽院政期を中心に、武家社会の中心となる源平両氏や東国・西国のいくつかの事例を検討した。保元・平治の乱や治承・寿永内乱につながる対立関係や社会構造が醸成された時期として注目すべきことを私なりに指摘することができたと思う。

院政期や武家政権の成立過程に関しては既に膨大・精緻な研究が蓄積されており、屋上屋を架したに過ぎないが、本格的な武家社会の成立の様相についても自分なりに整理することを課題として、蕪雑な稿を終えることにしたい。

#### 註

（1）峰岸純夫「鎌倉悪源太と大蔵合戦」（『三浦古文化』四三、一九八八年）、木村茂光「大蔵合戦と秩父一族」（『河越氏の研究』名著出版、



二〇〇三年)、菊地伸一「大蔵合戦と畠山重忠の乱再論」(『武蔵武士団の諸相』勉誠出版、二〇一七年)など。なお、中央の政局については、河音能平「ヤスライハナの成立」(『中世封建社会の首都と農村』東京大学出版会、一九八四年)、元木泰雄「院政期政治構造の展開」(『院政期政治史研究』思文閣出版、一九九六年)などを参照。

(2) 拙稿 a 「武蔵国足立郡司武蔵武芝とその行方」(『日本律令制の展開』吉川弘文館、二〇〇三年)、b 「将門の乱と藤原秀郷」(『東洋大学文学部紀要』史学科篇三六、二〇一一年)、c 「純友の乱と西国武者の生成」(同三三、二〇〇八年)、d 「刀伊の入寇と西国武者の展開」(同三四、二〇〇九年)など。

(3) 拙稿 a 「源頼信と河内源氏の展開過程」(『東洋大学文学部紀要』史学科篇三九、二〇一四年)、b 「在庁官人と中央出仕—平氏家人の動向を中心に—」(『海南史学』五二、二〇一四年)、c 「伊賀国における在庁官人の動向と平氏の進出」(『東洋大学大学院紀要』五三、二〇一七年)、d 「余五將軍平維茂の軌跡」(同五四、二〇一八年)、e 「源頼親と大和源氏の生成」(『東洋大学文学部紀要』史学科篇四三、二〇一八年)、f 「前九年・後三年合戦と武力—河内源氏と地域権力の様相—」(同四七、二〇二二年)など。

(4) 拙稿 a 「因幡国伊福部臣古志」と因幡国の相撲人」、b 「古代土佐国・讃岐国の相撲人」、c 「古代常陸国の相撲人と国郡機構」、d 「古代阿波国と国郡機構」(『在庁官人と武士の生成』吉川弘文館、二〇一三年)、e 「半井家本『医心方』紙背文書と国司の交替」(『東洋大学文学部紀要』史学科篇四二、二〇一七年)、f 「真上勝岡異見」(同四四、二〇一九年)、g 「安芸国の凡直と国郡機構」(『海南史学』五七、二〇一九年)、h 「清胤王書状群の研究」(『東洋大学文学部紀要』史学科篇四六、二〇二一年)、i 「尾張国解文試釈」(『東洋大学大学院紀要』五七、

二〇二二年)、j 「尾張国解文と郡司・国衛官人」(『白山史学』五七、二〇二二年)など。

(5) 元木泰雄「武士の成立」(吉川弘文館、一九九四年)、野口実「源氏と坂東武士」(吉川弘文館、二〇〇七年)など。

(6) 浅香年木「治承・寿永の内乱論序説」(法政大学出版局、一九八一年)、川合康「鎌倉幕府成立史の研究」(校倉書房、二〇〇四年)など。

(7) 上杉和彦「源平の争乱」(吉川弘文館、二〇〇七年)、宮田敬三「源平合戦と京都軍制」(戎光祥出版、二〇二〇年)など。

(8) 拙著「古代豪族と武士の誕生」(吉川弘文館、二〇一三年)。

(9) 「武士」の語義をめぐるのは、明石一紀「将家・兵の家・党」(『民衆史研究の視点』三一書房、一九九七年)、錦織勤 a 「鎌倉幕府法にみえる「武士」について」(『日本歴史』六〇八、一九九九年)、b 「明月記」にあらわれる「武士」の語義について」(『史学研究』二二九、二〇〇〇年)、c 「平安期「武士」表」(鳥取大学教育地域科学「紀要」(地域研究)五の一、二〇〇三年)、d 「平安期の日記に見える「武士」について」(『史学研究』二四一、二〇〇四年)なども参照。なお、『左経記』長和五年(二〇一六)二月十七日条に「令瀧口等射定其能不」(件武士等、上達部各被貢拳、総奉試廿二人)」とあるが、これは瀧口武者(武士)のことである。

(10) 藤田佳希「源経基の出自と「源頼信告文」」(『日本歴史』八〇五、二〇一五年)。

(11) 元木泰雄「十一世紀末期の河内源氏」(『後期摂関時代史の研究』吉川弘文館、一九九〇年)。

(12) 武芸の持つこうした側面については、高橋昌明「定本 酒吞童子の誕生」(岩波書店、二〇二〇年)、野口実「伝説の將軍 藤原秀郷」(吉川弘文館、二〇〇一年)、関幸彦「王朝武士の記憶」(『武士の原像』吉川



弘文館、二〇二〇年）などを参照。

(13) 五味文彦『武士と文士の中世史』（東京大学出版会、一九九二年）。

(14) 但し、この「武士」や「武芸」が武家という新しい社会集団の形成に直結するものではないことは、藤田佳希 a「王権から見た武士」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五九の四、二〇一四年）、b「武士と六芸」『日本歴史』八五五、二〇一九年）などを参照。

(15) 元木泰雄『河内源氏』（中央公論新社、二〇一一年）九八―一〇一頁は、資通は義親の子為義の乳父とする。白河院は義親周辺者による穏便な措置を施そうとしたが、それに反する結果になり、義親は温情に期待して隠岐配流を受け入れたものの、義家の死によって帰京の見込みがなくなったため、次の濫行に及ぶとする。野口実「藤原秀郷と秀郷流武士団の成立」『中世の北関東と京都』高志書院、二〇二〇年）一八頁は、資通は承徳二年（一〇九八）に豊後権守になっていたから、自らの利害に基づいて主体的に濫行に加担したと見ることもできると述べる。

(16) 元木註（11）論文。

(17) 小野真嗣「後三年合戦と源義光」『駿台史学』一四六、二〇一二年）、佐々木紀一「源義忠の暗殺と源義光」『山形県立米沢女子短期大学紀要』四五、二〇〇八年）など。

(18) 米谷豊之祐「源為義 其の家人・郎従の結集・把持」『院政期軍事・警察史拾遺』近代文芸社、一九九三年）、川合康「横山系図と源氏將軍伝承」『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館、二〇一九年）など。

(19) 土田直鎮「公卿補任を通じて見た諸国の格付け」『奈良平安時代史研究』吉川弘文館、一九九二年）。

(20) 高橋昌明『増補改訂』清盛以前』（平凡社、二〇一一年）。

(21) 註（3）b拙稿。なお、備前守時代の事績として、『中右記』永久

二年（一一一四）三月九日条には海賊追捕の成果が見え、九月二十五日・十月五日条では「鎮西強盗」と称される濫行者が正盛の居所に庇護されているとの嫌疑が記されており、西国での基盤作りの一端が知られる。

(22) 下向井龍彦『日本の歴史』07 武士の成長と院政（講談社学術文庫、二〇〇九年）三一〇―三一二頁。

(23) 元木泰雄『藤原忠実』（吉川弘文館、二〇〇〇年）。

(24) 元木泰雄「源義朝論」『古代文化』五四の六、二〇〇二年）。

(25) 東野治之「日記にみる藤原頼長の男色関係」『史料学遍歴』雄山閣、二〇一七年）。

(26) 伊勢神宮膝下の伊勢国の事例としては、勝山清次「伊勢神宮領寛御厨をめぐる二・三の問題」『中世伊勢神宮成立史の研究』塙書房、二〇〇九年）などを参照。

(27) 市田弘昭「平安後期の荘園整理令」『史学研究』一五一、一九八一年）、川端新「平安後期における大和国司」『荘園制成立史の研究』思文閣出版、二〇〇〇年）三二〇―三二一頁註（90）など。

(28) 元木註（24）論文五頁。

(29) 高橋秀樹『三浦一族の研究』（吉川弘文館、二〇一六年）四五―四六頁。

(30) 森幸夫「大庭景親」『中世の人物 京・鎌倉の時代篇』第二卷、清文堂、二〇一四年）、鎌倉佐保「荘園制の成立と武門支配の統合」『歴史学研究』八四六、二〇〇八年）など。なお、人物比定に諸説があるが、『水左記』承暦三年（一〇七九）八月三十日条「散位宣基来語云、相模国脚力上洛申云、彼国住人権大夫為季与押領使景平、今月十日比合戦、為季已斬景平首了云々。因茲景平一族発数千軍兵、更攻為季云々」は、通字から三浦氏と大庭氏の対立とする理解も示されている。

- (31) 千葉氏の歴史については、福田豊彦『千葉常胤』（吉川弘文館、一九七三年）を参照。
- (32) 元木註(24) 論文は、藤原親通一族は摂関家に従属しており、この時点では義朝は忠実の權威を利用して親通を封鎖することができたとし、まだ全面的に鳥羽院側ではなかったとする。しかし、摂関家の内部対立の進行に留意すると、親通は忠通側であり、鳥羽院につながる勢力と見て、義朝も父為義とは別の選択をして、鳥羽院側に立っていたと考えることができよう。
- (33) 元木註(5) 書、野口註(5) 書。
- (34) この源義宗は佐竹義宗に比定され、鎌倉幕府草創期の佐竹氏討伐につながる対立の淵源と位置づけられてきたが、佐々木紀一『平家物語』の中の佐竹氏記事について（『山形県立米沢女子短期大学紀要』四四、二〇〇八年）、野口実「東国武士の実像」（註(15) 書）は頼義の弟頼清流の人物に比定するのがよいとする。
- (35) 野口実「稻荷社を造営した二人の東国武士」（『朱』四三、二〇〇〇年）によると、千葉氏は代々世襲してきた下総権介職さえ、一族の海上氏に奪われるような事態になっており、千田判官代親政も千田・匝瑳北条などに分立していた原・金原氏らの両総平氏一族を統合し、下総国東北部に独自の武力集団を形成していたという。
- (36) 峰岸註(1) 論文、木村註(1) 論文など。
- (37) 野口実「鎌倉武士と報復」（『古代文化』五四の六、二〇〇二年）。
- (38) 大石直正「治承・寿永内乱期南奥の政治的情勢」（『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館、二〇〇一年）。
- (39) 元木註(5) 書。
- (40) 註(2) 拙稿d、註(4) 拙稿fなど。
- (41) その他、齋藤拓海a「備後国の平氏家人奴可入道西寂について」（『芸備地方史研究』二八〇、二〇一二年）、b「奴可入道西寂補考」（『史人』六、二〇一五年）、c「平氏家人周防国岩国氏について」（同七、二〇一八年）などを参照。『吾妻鏡』文治二年（一一八六）八月五日条所収源頼朝書状には長門国の「謀反人豊西郡司弘元」が見え、郡東・郡西は国府所在の豊浦郡が東西分割されたものである。
- (42) 湊哲夫「久米押領使漆間時国について」（津山郷土博物館『博物館だより』一六、一九九六年）。
- (43) 荻米一志「法然の父系をめぐる神話的要素」（『日本歴史』八二一、二〇一六年）。
- (44) 錦織勤「平安末期西伯耆の有力武士「紀成盛」について」（『鳥取地域史研究』五、二〇〇二年）、註(3) a 拙稿など。
- (45) 保立道久「義経の登場」（日本放送出版協会、二〇〇四年）序章。『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）六月二十三日条に見える「平泉姫宮」はこの王子の姉妹で、二人は藤原資隆の女八条院右衛門佐と後白河院との間に誕生したという。史料22の九条院は近衛天皇の妻九条呈子、大和国の二川冠者は大和源氏源信頼である。
- (46) 岡村吉彦「鎌倉後期の伯耆国守護と小鴨氏」（『鳥取地域史研究』一、一九九九年）。
- (47) 拙著『平安時代の国司の赴任「時範記」を読む』（臨川書店、二〇一六年）、註(4) 拙稿a・b・d・gなど。
- (48) 年次比定および文書名は工藤敬一「鳥羽院政期肥後の在地情勢」（『熊本史学』五〇、一九七七年）による。
- (49) 工藤註(48) 論文、森本正憲「中世成立期における肥後地方の情勢について」（『古代中世史論集』吉川弘文館、一九九〇年）、註(4) 拙稿fなど。
- (50) 『国司補任』第五（続群書類従完成会、一九九一年）。

- (51) 工藤註(48) 論文一〇二頁。
- (52) 江平望「阿多忠景について」(『古代文化』五五の三、二〇〇三年)、野口実「鎮西における平氏系武士団の系譜的考察」(『増補改訂中世東国武士団の研究』戎光祥出版、二〇二一年)、日隈正守<sup>a</sup>「一宮制成立過程に関する基礎的考察」(『西南地域史研究』八、一九九四年)、b「平安後期から鎌倉期における大隅国正八幡宮の禰寝院支配」(『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学編六一、二〇一〇年)、註(4) f 拙稿など。
- (53) 江平望「豊後冠者義実について」(『鹿児島中世史研究会報』五〇、一九九五年)、清水亮「鎌倉幕府の九州支配と薩摩平氏」(『兵たちの時代』I、高志書院、二〇一〇年) など。
- (54) 柳原敏昭「平安末く鎌倉期の万之瀬川下流域」(『古代文化』五五の二、二〇〇三年)、永山修一「平安時代中・後期の薩摩国・大隅国と南島」(『先史・古代の鹿児島』通史編、鹿児島県教育委員会、二〇〇六年)、拙稿「唐物・南島産品と小野宮流・御堂流」(『東洋大学文学部紀要』史学科篇四五、二〇二〇年) など。
- (55) 森本正憲「中世成立期における肥前地方の情勢について」(『日本中世史論攷』文献出版、一九八七年)、小川弘和「院政期の肥前社会と荘園制」(『中世的九州の形成』高志書院、二〇一六年)、註(4) 拙稿f など。

## **“The coming of the world of samurai warriors” and some aspects of the provincial governors’ offices**

MORI, Kimiyuki

### **Abstract:**

Zien, the Head Priest of Tendai who was descended from Sekkanke (the highest rank of the nobles of Fujiwara Family) said that after the death of ex-Emperor Toba on the 2<sup>nd</sup> of July in the 1<sup>st</sup> year of Hougen (1156 A.D.) occurred the civil war of the Hougen era and came “the world of samurai warriors”. This is a really correct viewpoint of History as a person who lived in the last years of the Heian Period and the early years of the Kamakura Period. But samurai warriors are only warriors, good at military arts?

Before 1156 A.D. they were constructing their territories in each area of this archipelago. So in this article I want to reveal how and when they evolved into the new governors’ groups. Chapter 1 explores Minamoto no Yoshiie who was thought to be the chief of samurai warriors. After the end of the Early Nine Years’ and the Next Three Years’ Battles how Yoshiie and Kawachi Genji struggled in Kyoto the Capital of Japan at that time, and how Ise Heishi Family (Taira Clan) appeared as a counterforce of Kawachi Genji.

Chapter 2 and 3 explore some aspects of the provincial governors’ offices in the years of 1140s. In Bando area so-called Tenyo complications broke out in Sagami and Shimofusa Provinces. They were the cases of the battles between the evolving samurai warriors’ families and provincial governors who were connecting with another samurai warriors intervened by Minamoto no Yoshitomo (father of Yoritomo).

Looking at Saigoku area (western part of this archipelago) paralleling with Bando broke out similar complications. I address the cases of Houki and Higo Provinces in this research. In Houki Province Murao Family who had power in the western part and Kokamo Family who was the chief provincial officer battled plural times. In Higo Province broke out complications between Kikuchi Family and provincial governors’ office. These cases are good examples for thinking about the total figure of this archipelago before the dawn of “the coming of the world of samurai warriors”.